



★高茶屋大垣内遺跡

- ① 四ツ野B遺跡
- ② 池の谷古墳
- ③ 高茶屋大塚古墳
- ④ 木造赤坂遺跡
- ⑤ 雲出島貫遺跡

※カシミール3Dスーパー地形図を用いて製作  
 ※参考文献  
 伊藤裕偉 2007 『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』  
 中世史研究叢書⑩ 岩田書院

ミステリアスな高茶屋大垣内遺跡

謎1：古墳時代の高茶屋は交易のまち？

高茶屋大垣内遺跡周辺の台地上では、南側の四ツ野B遺跡（①）にて弥生時代の集落や銅鐸がみつかっています。一方の高茶屋大垣内遺跡では、弥生時代の遺構や遺物はほとんどみつからず、古墳時代の始まりとともに大型の掘立柱建物と25棟を超える竪穴建物からなる集落が形成されます。どうして突如としてこのような大規模集落が出現したのでしょうか？このヒントとなるのは今回の調査で出土した近畿系（布留式）の土器や、昨年度の調査で出土した関東系の土器（五領式など）の存在です。古墳時代に入り、東西の地域をつなぐ交易ルート的重要性が増した結果、天然の良港である藤瀧を見おろすこの地に大規模な集落が形成されたことが読み取れます。

謎2：中世の高茶屋は武士のまち？

高茶屋大垣内遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての溝が多くみつかっています。このような溝などで区切られた空間は屋敷の跡と考えられ、当時の高茶屋大垣内遺跡では広大な屋敷地がひろがっていた可能性があります。雲出川の流域では、木造赤坂遺跡（④）や雲出島貫遺跡（⑤）において同時期の屋敷地がみつかり、当地域に影響をもっていた伊勢平氏との関連が窺える遺物が出土しています。高茶屋大垣内遺跡でも、今回の調査では当時の高級品である緑釉陶器や中国産の白磁がみつかった他、建物の柱の穴からは鉄の刀が出土しました。平安時代から鎌倉時代にかけて、平氏などの有力者との繋がりを持つ武士の勢力が、この地域に屋敷を構えていたようです。

調査遺跡名：高茶屋大垣内遺跡

所在地：三重県津市城山

調査面積：2,503㎡（予定）

原因事業名：令和6年度 県盲・聾学校建築工事

調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター

調査期間：令和6年5月7日～令和6年9月5日（予定）

高茶屋大垣内遺跡（第7次）発掘調査現地説明会

主催：三重県埋蔵文化財センター

開催日：令和6年7月27日（土）



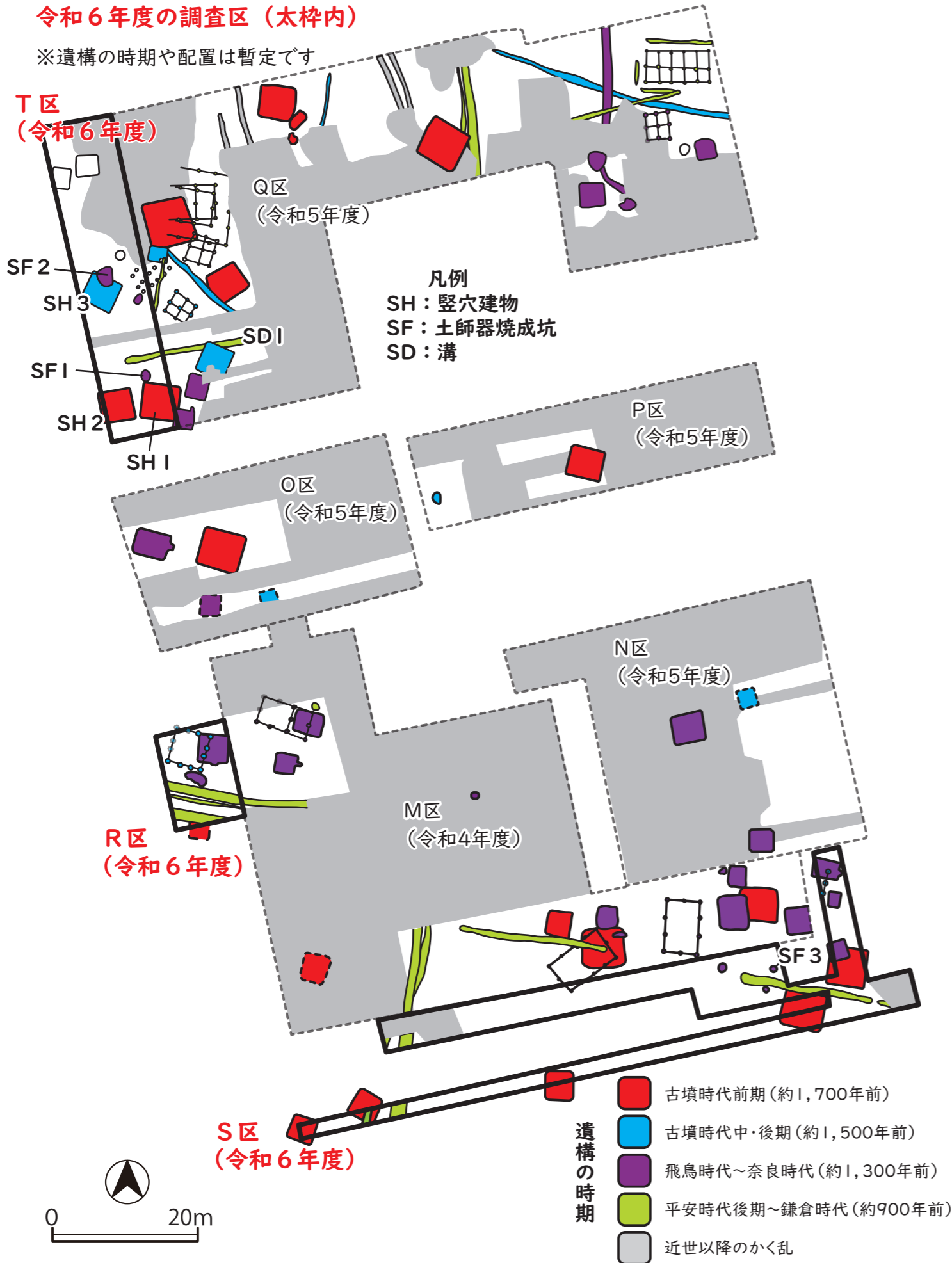
古墳時代に伊勢湾岸地域を中心に使用されたS字状口縁台付甕（S字甕）ですが、今回の調査では県内ではめずらしい台のないS字甕が発見されました。似た形の土器は奈良県などで出土しています。

ヒト・モノ・情報が集まる高茶屋大垣内遺跡

高茶屋大垣内遺跡は、津市南部に位置する遺跡です。北を相川、南を天神川に区切られ、東に伊勢湾を臨む眺望のよい台地上に立地しています。平成9・10年度の第3・4次調査では、古墳時代の大型掘立柱建物を含む方形区画や、土器や鉄器の製作に関わる遺構・遺物がみつかり、令和4・5年度の第5・6次調査では、奈良時代の土師器生産に関わる遺構や、平安時代末期から鎌倉時代にかけての道路や火葬穴がみつかりました。高茶屋大垣内遺跡は古墳時代から中世にかけて、地域内での生産活動や他地域との交流を担った拠点的な集落であるといえます。現在調査中の第7次調査では古墳時代から奈良時代の竪穴建物が10棟以上みつかり、古墳時代の掘立柱建物や、平安時代後期～鎌倉時代の屋敷を区画する溝などが確認されています。古墳時代前期の竪穴建物からは完形に近い土器が多く出土しており、地元の土器に混じって近畿系（布留式）の土器が散見される他、三重県内ではほとんどみられない「台なし」のS字甕が出土しています。また、平安時代後期から鎌倉時代の遺構からは東海地方で生産された陶器（灰釉陶器・山茶碗）の他、近畿地方や伊賀地域で使われていた瓦質の土器（瓦器碗）や、当時の高級品である緑釉陶器や中国から輸入された白磁の壺などがみつかりました。古墳時代から中世にかけて、高茶屋大垣内遺跡では様々な地域のヒト・モノ・情報が集まっていたことがわかりました。

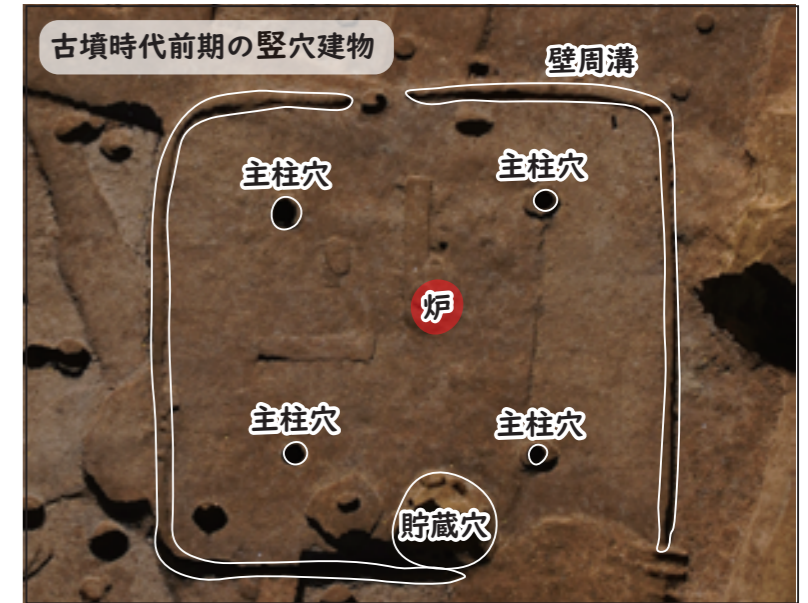
令和6年度の調査区（太枠内）

※遺構の時期や配置は暫定です



今年度の発掘調査では、古墳時代前期の竪穴建物が10棟近く確認されています。この時期の竪穴建物は一辺5m前後の正方形を呈し、中央に火を焚く炉を持ち、四隅には屋根を支える4つの柱（主柱穴）がたてられます。南壁沿いには食べ物などを貯める穴（貯蔵穴）が掘られ、壁際には細い溝（壁周溝）がめぐります。

これらの竪穴建物からは多くの土師器が出土しており、食料などを入れる壺、煮炊き用の甕、料理などをのせる高杯など、当時の人々の生活がわかる様々な種類の土器がみつっています。



奈良時代の土師器焼成坑（SF1）



昨年度に引き続き、今年度発掘調査でも奈良時代の土師器焼成坑（土師器を焼く穴）が少なくとも3基見つかりました。大きさは直径50cm前後のものから、1mを超えるものまで様々で、いずれも床面が火を受けて赤く変色し、細かい土師器の破片が多く出土しています。

南側のS区では、土師器焼成坑の隣に粘土がたくさん入った穴（粘土貯蔵穴）がみられ、昨年度に調査したQ区でも同様の遺構のセットが確認でき、この遺跡における土師器生産の特徴といえます。

平安時代後期から鎌倉時代の高茶屋大垣内遺跡にて注目される遺物は白磁と緑釉陶器です。当時の白磁は中国で生産されたもので、国産の陶器よりも高い温度で焼かれ、「唐物」として重宝されました。中世に入ると椀や皿などは農村部にも普及しますが、今回出土した白磁の壺はめずらしいものです。

また、緑釉陶器は国内でつくられた釉のかかった高級な陶器です。この時代の高茶屋大垣内遺跡には有力者とのつながりを持った勢力がいたようです。

平安～鎌倉時代の様々な土器・陶磁器

